

アメリカ合衆国のマイノリティ女性文学における
「女神信仰」の表象

平成15・16年度 科学研究費補助金（基盤研究 C(2)）

研究成果報告書
（研究課題番号15513506）

平成17年5月

研究代表者

杉山 直子

〒305-8585
埼玉県上尾市大宮

埼玉大学図書館



205801231

研究の概要

本研究は、1970年代以降、カウンターカルチャーの隆盛およびフェミニスト神学の発達と主に米国の女性に浸透した「女神信仰」が、一過性の軽薄な流行にとどまらず、多くの女性、ひいてはアメリカ文化全体に大きな影響をもたらすものであることをふまえ、この「女神信仰」と深い関連性のあるマイノリティ女性の文化、文学を中心に、主流文化との相互作用にも注目しつつ、彼女たちの言説において「女神信仰」がどのように表象されているか、またその意味、重要性は何かを明らかにしようとしたものである。

平成15年度

マイノリティ女性文学において「女神信仰」がどのような形で表象されているかについて、一次資料、二次資料を検索し、文献表を作成した。また、ユダヤ・キリスト教もふくめ「神」のジェンダーについて論じた文献についても同じく検索、文献表を作成した。9月に渡米、インディアナ大学、UCLA 図書館等で資料を収集、また作成中の論文についてインディアナ大学英文科スーザン・グーバー教授よりレビューをうけた。また成果の一部をアメリカ学会、日本女性学会、企業家研究フォーラムにて発表した。

平成16年度

15年度に引き続き文献を収集、文献の研究を行なった。それらにもとづき、成果の一部をMESA(多民族文学学会)、にて行なった。これらの発表の内容およびそれを発展させたものとして、共著2点を出版した。またこれらの成果の集大成として、単著『母親の語り、母親の力——現代アメリカ小説の中の女神たち——』(仮)を執筆中である。

目次

研究の概要	…2
前書き	…4
「母が語ること」——現代アメリカ合衆国文学における 女神表象の考察に関する覚書き——	…5

口頭発表

平成15年

Maternal Discourse and Maternal Power in Maxine Hong Kingston's

TripmasterMonkey: His Fake Book.

アメリカ学会全国大会

アメリカ文学・アメリカ文化の中の母子家庭あらたな家族モデルのヴィジョンをめざして

日本女性学会全国大会、

米国における女性企業家像の成立と変遷

企業家研究フォーラム冬季研究会、

平成16年

黒い Divine Woman——トニ・モリソンの『パラダイス』に見られる「母なる神」表象——

多民族文学学会

The Woman Warrior 「女性兵士」というパラドックス

新英米研究会、

Response to Professor Sau-ling Cynthia Wong's "Maxine Hong Kingston in a Global Frame"

アジア系アメリカ文学会、

"We 'se uh Mingled People": Zora Neale Hurston's Hybrid Subjectivity

Comment on "Mules and Musicals: A Poetics of Hybridity in *Their Eyes Were Watching God*"

立命館アメリカン・セミナー

著書

共著『太平洋世界の文化とアメリカ: 多文化主義・土着・ジェンダー』(瀧田佳子編、彩流社、2004)

共著『越境・周辺ディアスポラ——三つのアメリカ文学』(松本昇 他編、南雲堂フェニックス、2004)

まえがき

この研究成果報告書に掲載した論文は、現代アメリカのフェミニズムがとりこんできた問題の中で、象徴としての母親に着目し、家父長制の下での抑圧装置として働く「制度としての母性」やそこにおさまらない豊かな「経験としての母性」、およびそれだけではなく、「女神信仰」をも視野にいれた、権威としての母性について論じ、その観点から、さまざま母親をめぐる言説の分析、批評をこころみるプロジェクトの、全体像を提示したものである。いわば「青写真」「序論」にあたるもので、ここで提示した全体像をふまえながら、今後個々の作家についての論文を執筆し、単著としてまとめる予定である。

このプロジェクトを着想した当初は、「様々な文化的背景のもとで、母親の理想像や現実もまた一枚岩ではない」程度のことを結論として導き出す予定であったが、合衆国内外の母性についての文献を検索、研究するうちに、その内容の多様さ、複雑さ、なによりも量の膨大さに驚かされることとなった。完成が当初の予定よりも大幅におくれ、報告書としても未熟、未完成なものであるのはもちろん著者の非力によるものではあるが、このテーマの奥深さと魅力をもまた反映するものと理解していただければ幸いである。

本論文で言及した多くの作家、特にトニ・モリソン、マキシン・ホン・キングストン、レズリー・マーモン・シルコウは現役作家であり今後の活躍が大いに期待される。またマイノリティの女性作家は質、数ともに充実、多様化の一途をたどり、研究者としては、陳腐な言い草ではあるがまさに「うれしい悲鳴」をあげたい現状である。彼女たちの業績をこれからも追い続け、あらたな批評の切り口を求め続けることが、しばらくは自分の課題となりそうである。

最後になるが、この研究に際して、日米両国の多くの方々にお世話になった。埼玉大学教養学部および日本女子大学の同僚の方々、アメリカ学会、日本アメリカ学会、新英米文学研究会、MESA、アジア系アメリカ文学会、企業家研究セミナー、立命館アメリカン・セミナーの皆様、UCLA および UC パークレー、インディアナ大学でお世話になった方々など、氏名の列挙は避けるが、ここに心より感謝の意を表したい。

平成17年5月

研究代表者 杉山 直子

「母が語ること」——現代アメリカ合衆国文学における女神表象の考察に関する 覚書き——

語られる母親から語る母親へ

母親であることと、書くこと・語ることの間にはどのような関係があるのか？母親として書くこと・語ることにはどのような意味があるのか？これは英米のフェミニスト批評家の取り組んできた問題のひとつである。

文学に描かれた母親像や、母親の視点からの語りについてのフェミニスト批評は、当然のことながらフロイト精神分析の影響が大きい。多くのフェミニスト的視点をもつ研究者が、さまざまな分野で、フロイトの男性中心主義、父親偏重を批判しながらも、精神分析の概念を用いて、母親についての研究を行ってきた。たとえば、ナンシー・チョドロウの『母親業の再生産』は、人格形成におけるエディプス期以前の母親との関係を重視し、そこに男女の関係の不均衡の原因と、より対等な男女関係への糸口をみいだそうとする。

英米のフェミニスト批評で母親を扱う場合、いわゆるフレンチ・フェミニスト、ということばでひとくりにされることの多い3人、すなわちリュス・イリガライ、エレヌ・シクスー、ジュリア・クリステヴァの影響も忘れてはなるまい。3人はいずれもフロイト、そしてジャック・ラカンに依拠しながらも実のところそれぞれ主張するところはかなり異なるのだが、この中では、エディプス前期の母子関係を重要視するクリステヴァが、母親的なものが詩的創造において重要な役割をもち、また現状をくつがえす潜在力を持つと主張するがゆえに、広く引用されてきた。また詩人アドリエヌ・リッチは『女から生まれる』をはじめとする一連の女性と創作についての考察において、詩人として、母親としての自己の体験を語りつつ、母親と子供の関係こそ、すべての人間関係の原型であり、特に女性にとって、女性の創造力の源泉として、女性同士の愛情と養育を与えあう関係、中でも母親と娘の関係が、その原型として重要であることを強調した。

文学における母親像や、母子関係についての考察は、たとえフェミニスト的な視点でなされた研究であっても、子供の視点、娘の視点からのものが中心であることが、問題視されるようになってきた。文学作品であっても、批評理論であっても、母親について扱ったものは、母親自身の視点よりも娘の視点から書かれたものが圧倒的に多い。そして往々にして、そこで描かれる母親は、家父長制のもとで自我を否定された無力な犠牲者であったり、また同じく家父長制の犠牲者であっても、そのシステムを内面化して、次世代の娘に同じ自己否定を強いる権力の手先として、反発の対象とすべき存在であったりした。愛情の糖衣をまとった母親の支配からいかに脱出し、母親との絆を自分の手で断ち切って、負の連鎖から逃れて新しい可能性のある人生を切り開くか。このような「いかに母親の支配、しがらみを断ち切るか」をテーマにした言説が、フェミニストの視点から書かれた女性の作品には、文学や批評書のみならず、一般的なセルフ・ヘルプものやハウツーものにもあふれた。ナンシー・フライデイのベストセラー『マイ・マザー、マイ・セルフ』（1977）などはその好例である。リッチの『女から生まれる』にも、リッチ自身の、母

親に対するアンビバレントな感情が詳述されている。1960年代以来の第二波フェミニズムの火付け役とされる、ペティ・フリーダンの『新しい女性の創造』にも、母親が子供を過度に支配し、コントロールするようになることの弊害が力説されている¹。

その後、娘の立場から母親(あるいは母親的役割を果たす年長の女性)を批判する傾向について指摘するフェミニスト批評家も現れてきた。たとえばジェーン・フラックスは「母娘関係とフェミニズム内部における養育性と自立との葛藤」(1978)ですでにこの問題について指摘しているし、精神分析学や心理学の分野における娘の立場からの母親バッシングの一面性を批判する立場も多くみられるようになった。

そのような経緯をへて、1980年代には、語る主体としての母親に、より焦点があてられるようになってきた。現代アメリカのフェミニズムは、フリーダンの『新しい女性の創造』以来、女性の抱える問題はかならずしも個人レベルのものではなく、社会全体を家父長制という制度として捕らえたときに初めて理解可能であり、また女性が一人の人間として自己実現をはかるにはどうしたらよいか、という問題にとりくんできた。しかしそれが娘の視点からのみ行なわれることによって、母親にさらなる沈黙を強いてきたのではないか。無力な犠牲者でもなく、抑圧者の手先として切り捨てられる存在でもない、自ら語る母親の声はないのだろうか。ないとすれば、それはなぜなのだろうか。あるとすれば、彼女たちが語ることを可能にしたものはいったい何なのか。

マリアン・ハーシュの『母と娘の物語』は、そのような疑問に正面からとりくんだ文学研究の著書として重要である。なぜ母親の物語が、母親の視点から語られることがこれほどまでに少ないのか。わたしたちは、エディプスの物語を、知らぬうちに実の父親を殺し母親と寝たことを悟った彼の苦悩を知っている。しかし彼の母親ジヨカスタについてはどうか。おぞましい真実が露見したあと、自殺にいたるまで、彼女が何を考えどのように苦悩したのか、われわれは何も知らされていない。ハーシュは、西洋文学の伝統において、このように母親の物語は子供の視点から語られ、母親の視点から語られる物語がきわめて少ないことに注目した。

なぜ女性は、娘としてのほうが、母親としてよりも雄弁なのか。なぜ、創作においても、批評においても、母親の声が少ないのか。この問いには、むろんさまざまな形で答えが提供されている。

もっともわかりやすく、また今日にいたるまで多くの女性に当てはまる回答は、「母親になった女性には、創作する時間もエネルギーもない」ということである。ティリー・オルセンの『沈黙』は、そのタイトルどおり、女性の創作力がいかにさまざまな形で抑圧され、沈黙を強いられてきたか、を古今の膨大な女性の作品から主に引用し、彼女たち自身によって語らせることで明らかにする労作である。オルセン自身、労働者階級の女性として、当然のようにフルタイムで働きながら子育てもし、その一方で書きたい気持ちにつき動かされて創作を続けようとしたが、創作にとれる時間が深夜や込み合ったバスの中という悪条件では、やはり生み出される作品は質、量ともにきわめて限定されたものとなってしまったことを自ら認めている。彼女自身のこのような例にとどまらず、母親となった女性は、出産による肉体的な衰弱、そして子育てや両親の介護や家事におわれて、創作する時間もエネルギーも失っていくことが多かった。オルセンの、そしてオルセンが丹念に集めた、創作する母親の挫折の物語は、現在にいたるまでしばしば繰り返され

ており、いまだに身につまされる女性読者も多いのではあるまいか。

80年代には、先述したような精神分析の影響をうけ、書くという行為の心理的プロセスに焦点をあてた研究がなされるようになった。たとえば、スーザン・スレイマンは、『自己の存在をかけた——現代美術および文学との遭遇』で、母親が、自分こそ子供の運命に全面的に責任があると考えがちであり、この全面的な責任感のせいで、母親となった女性は創作できなくなるし、できたとしても、母親としての罪悪感、創作するという行為が、子供を犠牲にして行われている、という罪の意識を反映した作品を書くことがおおい、と指摘する。彼女たちの作品に登場する母子関係には、「自分がなにかを創作するたびに、子供が苦しむ」というファンタジーが実に多くみられるというのである。

この例として、スレイマンは、ロゼレン・ブラウンの短編「グッド・ハウスキーピング」と長編小説『私の母の自伝』をあげている。「グッド・ハウスキーピング」では、写真家の女性が、赤ん坊のわが子をつねって泣かせ、赤ん坊の喉の内側や舌がふるえる様子を芸術家の冷静なまなざしで観察し、撮影する。『私の母の自伝』では、主人公がなすすべもなく見つめるうちに、主人公の幼い娘が川で溺死してしまう。

バーバラ・ジョンソンもまたこの母親特有の、子どもの運命について抱く責任感と罪悪感について、「頓呼法、生命化、中絶」で言及している。抒情詩における男性と女性の語り手との相違について、精神分析の概念をつかって説明を試みるこの論文で、ジョンソンは、「あたかも、男性の著作とは生来的に生産的であるのにひきかえ、女性の著作はなぜか生来的に赤ん坊殺しの」であると述べている(705)。ジョンソンは、このような母親の罪悪感とは母親である女性を著作から遠ざけ、また創作する際にも、表現のさまざまな可能性を抑圧する方向にはたらく、と述べる。

多くの詩的効果が、詩の語り手のジェンダーを通して明らかにされる、いろいろな期待に応じて、色づけられていることは明らかだ……女性がわが子の死について、純粋な喪失感以外のことを語る時には、ある強力なタブーが犯されている。クリフトンの詩(「失われた子供の詩」)において、流産と中絶の区別が判然としないうこと自体、子供の死がいかなるものであれ、それは母親の犯した犯罪であると認識されるということを示している。母親が、母親であれば当然防ぐことができたはずの死である、と(705)。

スレイマンとジョンソンは両者ともに精神分析理論に言及し、母親が統一された主体を持つことの、不可能性とはいわないまでも困難さを説明しようとする。スレイマンはメラニー・クラインの、すべての芸術活動は、ごく幼いころの母親を再び発見しようとする試みを反映し、母親の身体をとりもどそうとする試みである、という説に言及する。もしそうだとすると、すべての芸術家は、子供の立場から創作しているわけだから、たとえその芸術家が自ら母親であろうとも、創作するときはやはり娘の立場からの創作ということになるわけである。ジョンソンは、ラカンが精神分析的言語学理論を引用して、そもそも言語というものが母親を求める声から発したものである、という。したがって、「子供の立場以外に、発言する立場を確立しようとする試みは困難である」(706)。これらの説明は、それなりに説得力がある。たとえば、キム・チャーニンの『母親を産んだ女』は、チャーニン自身をふくむ8人の女性の母娘関係における葛藤と和解をフィクション化したものであるが、母親として語ることが、心理的にいかに困難かを示す好例といえよう。タイトルで

もわかるように、この著書に登場する8名の女性は、自分の出産や子育て体験、その他の人生の諸局面について語るときでも、自分を「母の娘」として意識しつづけている。チャーニン、カウンセリング臨床の経験から、この8つのエピソードに登場する女性たちは、母親を産む、つまり、それぞれの母親に自分の役目を認識させ、自分が娘であることを母親にきちんと確認させることによって、精神的危機をのりこえることができた、と解説している。

スレイマンはじめ、母親の声の不在を指摘する批評家の多くは、しかしながら、母親の声は文学に存在しないわけではなく、その声に耳をかたむけていくことが重要であると述べている。そのような試みが、たとえばハーシュの『母と娘の物語』やスレイマンの『自己の存在をかけて』であり、どちらの著作も母親の語る物語の具体的な例に着目し、精読、解釈することによりかなりのスペースをさいている。母親の語り注目することにより、われわれはフロイト的な枠組をこえ、人間関係を執着と支配に限定するような二項対立的なパターンからの脱却の糸口をつかめるかもしれない、という展望も、また子供中心の精神分析理論に対する批判や、その枠組みから出て、歴史的、政治的な母親の側面を考慮にいれるべきだという認識も、今日では、多くのフェミニスト研究者により共有されている。たとえば、サンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーは、『ノーマンズ・ランド 3: 前線からの手紙』で、母親作家がいままでになく増えていることを指摘し、したがって母親の沈黙は、普遍的な心理的要素というよりは、社会的、文化的な状況によるものであったということを示唆している。また、スザンナ・ウォルターズは、『大衆文化における母と娘』で、主に映画で描かれる母と娘の関係に着目し、語る主体としての母親に精神分析の枠組みをこえて着目することを主張している。スレイマンは精神分析を役に立つ概念として擁護しつつ、社会的、歴史的要素は考慮にいれられるべき、と主張する。

こうして、社会的、歴史的要素に着目することにより、母親、母性、母娘関係など、母親をめぐる議論に新たな生産的な視点から分析を加えることができるだろう。その中で「母親」をひとくりにせず、母親の中にもさまざまな差異があることを認識することが、より必要になってくることは自明である。

「母親」とは誰か？

アドリエンヌ・リッチの『女から産まれる: 体験としての母性と制度としての母性』は、主体として語る母親の声の例として、また母性の持つ「制度」「経験」という二つの側面の分析を通して、母性という概念そのものに疑問をつきつけることによって、大きなインパクトを持った。しかしながら、今日私たちは、母親という「体験」が、すべての母親に共有される均一なものではないことを知っている。またリッチが「制度」という言葉で表現した、「母親はいかにあるべきか」というイデオロギーも、万人にとって常に同じものではなく、時代とともに、また母親の所属する階級やエスニック・アイデンティティ等によっても異なる。たとえば奴隷制時代の黒人女性は、同時代の白人中産階級の女性のように、自分の家庭を守り、子育てに専念する「家庭の天使」であることなど期待されなかった。現代でも、たとえば貧しいシングルマザーは、家庭にとどまるのではなく、子供を養育するのに十分な収入を稼ぐために就労することを「母親の義務」として求められる。さらにいえば、「体験」というものは、ジェンダー・イデオロギーを転覆する潜在力を持つ一方で、必ずしも「制度」から完全に独立した概念ではない。私たちの体験は、「母親」概念もふくめたジ

エンダー・イデオロギーによって、その知覚のされかたも影響をうけているであろう。

そのような種々の問題点をふまえつつ、さまざまな母親の声に耳を傾けることこそ、母親の間に存在する差異や、母親の主体の多様性を認識するために役にたつだろう。そこには人種、エスニシティ、階級、歴史的、文化的背景など、さまざまな要素がからんでくるだろう。1980年代以降には、いわゆる第二波フェミニズムの世代の女性たちが自ら母親体験をし、その体験に学びつつ創作し、また母性についての先駆的な研究をうみだし、母親の声は、量・バラエティともに充実してきた。そのような声について、問うべき時期がきているのではないか。母親の声で語ることは、女性にとって、エンパワメントにつながるのか？ 文体において、内容において、母親の声とは新しい可能性を切り開くものなのか？

シュラムス・ファイアストーンは1970年に、『性の弁証法』で、子供がすべて試験管ベビーとして生まれ、女性が妊娠、出産の重荷から解放されることによって男女の平等が達成される、という未来像を提示した。このような再生産の形に男女平等のユートピアを見る者は今日非常に少ないにしても、妊娠、出産をめぐる技術や法的概念の変化は、ファイアストンの描いた未来像を、少なくとも理論上はほとんど可能にしてしまった。人工受精、代理母、クローン、といった技術は、ジェンダーをめぐる言説、特に、母親をめぐる言説に変化をもたらさざるをえない。「母親」という概念そのものが、社会的、文化的に構築された概念であり、変化していくものだということがあからさまになってきているのである。中でも、80年代後半に、いわゆる「ベビーM 事件」を一つの焦点として問題となった代理母論争は、「母親」とは誰か、また誰がそれを決めるのか、という母親アイデンティティのはらむ問題を前景化したことで、重要だといえる。「ベビーM 事件」とは、子どものないスターン夫妻と代理母契約を結んだ女性メアリ・ベス・ホホワイトヘッドが、出産後赤ん坊の引渡しを拒み、親権を争ったというもので、生物学上卵子を提供した「母親」であるホホワイトヘッドと、精子を提供したスターンおよびその配偶者のどちらに優先的に親権が与えられるべきか、赤ん坊を報酬とひきかえにひきわたすという契約の法的、倫理的な妥当性、裕福で夫婦ともに専門職についているスターン夫妻のほうが、労働者階級のホホワイトヘッド夫妻よりも赤ん坊にとって望ましい親である、という判断の妥当性など、さまざまな角度から議論され、争われた²。

ディオ・ファーカーは『もうひとつのマシン：言説と出産テクノロジー』で、このような議論の中で、「母親」アイデンティティが分裂し、細分化されてきたことを指摘する。「母親」といっても、「生物学的母親」「卵子提供者」「代理母」「代理母と契約した母親」「法的母親」「養育する母親」など、さまざまな内容をふくみ、「母親」というアイデンティティは今までのように確固たるものではなく、分裂し、脱中心化されている。また、同じく確固たるものと考えられていた、出産をめぐる医療倫理や法も、生殖医療が商業化される中で、それをあと追いつる形で、やはり混沌とした様相を呈している。例として、「ベビーM 事件」を契機として作られた新しい概念「精神的妊娠」について考えてみよう。アンドレア・E・スタンプは、1986年に、『イェール法律ジャーナル』でこの概念を、代理母制度の商業化を擁護する立場から提唱した。彼女によれば、「身体的な妊娠以前に、精神的な妊娠の開始、すなわち、「子供がほしいという欲望」から、ノーマルな親子関係がはじまる」というのである(190)。この場合、子どもを持ちたいという欲望、受胎、妊娠、出産、養育、という従来一人の人間(およびその近親者)によって行なわれてきたプロセスが細分化され、新しい概念が「誕生」している³。

スタンプの代理母制度擁護論では、精神と肉体を対立するものにとらえ、精神に優位を認める傾向がある西洋的思考法を手付かずのままにしたことによって、「母親」アイデンティティの細分化は、契約のイニシアチブをとった者——「ベビーM 事件」の場合には生物学的父親でもあるスターン——にとって有利になるだけの結果におわっている。「母親」アイデンティティの見直しと細分化、「精神的妊娠」という新しいカテゴリーの「誕生」が、どちらも契約父の優位を正当化し、ホワイトヘッドが「母親として不適」であることを証明するために利用されているのである⁴。このように、バイオテクノロジーの進歩は、新しく、より柔軟なライフスタイルやアイデンティティをもたらすのではなく、私たちの人生において、もっともプライベートで、細部にわたる部分までも家父長システムの監視と支配のもとに統括されていく結果を招きかねない危険をはらんでいる。このような近年のうごきは、母親という概念、すくなくとも潜在的には人種、階級、そのほかの社会的なファクターにかかわらずすべての女性をふくむとされてきたアイデンティティが、実際はさまざまな要素からなり、イデオロギーにもとづいて定義され、変更をくわえられ、操作されうるということを示している。

男も妊娠する：サイエンス（・フィクション）の悪夢

男性の妊娠は、医学的可能性としては取りざたされて久しいが、今日のところ実現にはいたっていない。ファイアストーン「男女ともに出産しない」という選択肢が、男女不平等に対する処方箋として夢想されたのであれば、「男も女も妊娠・出産する」というのはやはり、同じように、いやむしろ、より人間的な男女平等のユートピアの未来を想起させてもよさそうなものである。しかし男性の妊娠が可能になったとしても、そのことだけでは、やはりジェンダーに基づく力関係はくつがえされるどころか、強化されるかもしれない。男性の妊娠、出産をめぐる言説に着目してみると、妊娠する者とさせる者の間の関係、出産などについて、ユートピアどころか悪夢としかいいようのない状況が表象されているのである。新しい生殖科学の概念の中で、男性の妊娠する可能性についての言説が、代理母の言説とおなじく、伝統的なイデオロギーに支配され、それを再生産し強化する方向にむかうこともあるということなのだ。

オクタヴィア・バトラーのSF短編小説「ブラッドチャイルド」は、「わたしの男性妊娠小説」と作者本人が呼ぶ内容を持ちながら、きわめて陰鬱で苦痛にみちた状況を描いている。その中では、性愛が、恐怖と、マゾヒスティックな自己犠牲、個人の力ではどうすることもできない権力のアンバランスと分かちがたく結びついている。物語は、サソリを思わせる知的生物トリクのすむ惑星に、迫害を逃れて地球を脱出してきた人間の植民地を舞台にしている。植民地、といっても、人間たちはトリクの好意でかろうじて生存を許され、狭い居住区で、飼育殺しの無為な日々を送っている。トリクの社会は雌によってすべてが運営されている。雄は短命で知性もなく、その役目は射精のみという、ほとんど雌の身体の一部のような存在である。つまり、トリクは、アーシュラ・ル・グウィン『闇の左手』のゲセン人のように、ジェンダーレスな種族なのである。雌は、針のような器官を宿主となる動物に刺して卵を産みつけ、卵は孵化すると、宿主の体を食べる急激に成長し、外界へ出る。トリクが人間を居住区に住まわせているのは、この宿主として人間が適しているからである。トリクは特定の間人を選んでパートナーとし、時期が来るとそのパートナーの体に卵を産みつける。そして卵の孵化するタイミングをみはからい、宿主の体を切

開して子供を取り出し、すばやく家畜の肉を与えて成長させる。このプロセスが成功すればホストは死ぬことはないが、切開と子どもの取り出しは、苦痛にみち、グロテスクなものとして描写されている。しかもタイミングを誤るとホストは生きながら体の内部を食い荒らされて悲惨な死を迎える。人間は一家族から一人ずつ、ホストとなる男性を差し出すことになっている。女性は次世代のホストを産む必要があるため、ホストとしては使用されない。

主人公の少年ガンは、幼いころから、人間の植民地を管理する責任者であるツガトイに選ばれ、彼女の卵のホストとなるべく育てられた。ガンの母親とツガトイは幼いころから一緒に育ち、一種の友情関係にある。またガンとツガトイの間には、やはり一種の愛情と信頼関係が築かれている。とはいえ、ガンの一家は、ツガトイの管理のもとに、ガンを差し出すことによるのみ生存を許されている家畜のような存在にすぎない。一方、ツガトイは、人類というホストがいなければ自分たちの種族が衰弱し、滅びていくことを認識しており、人類が自発的にホスト役を続け、トリクと人間が共生関係を続けていくことを望んでいる。ガンとツガトイの間の感情の微妙さ、ガンが、敬愛するツガトイにホストとして選ばれたことのプライドと、卵を注入される際のマゾヒスティックな性的快感が巧妙に描かれているからこそなおのこと、この非ジェンダー化された妊娠、出産の物語は、いっそう恐ろしくグロテスクであり、妊娠、出産が、愛情、性的快感、生命ではなく、支配・服従と死により密接にかかわっている状況を浮かび上がらせている。

エリス・レイ・ヘルフォードの論文「私の子を身ごもるより死ぬことを選ぶのか? :オクタヴィア・バトラーの「ブラッドチャイルド」にみられるジェンダー、人種、種の構築」は、多くの読者がこのストーリーを、奴隷制のメタファーとして受け止めている、と指摘する。バトラー自身はそのような読みを否定しているが、ヘルフォードも指摘する通り、このような読みにはかなり説得力がある。作中の人類の状況は、黒人奴隷の状況と似通っている。特に、自らの再生産能力——セクシュアリティは言うに及ばず——を自らコントロールできない、という部分である。ガンの兄、キが苦々しげに言うとおりに、人類が閉じ込められている「檻」から脱走したとしても、逃げていく場所などどこにもないのだ。このような状況下では、ストーリーに描かれているように、奴隷/人類に、生殖に関して仮に「選択」の余地があったとしても、それは恐怖、反発、自己犠牲の感覚をともなったものであり、もし性的欲望や愛情があったとしてもそれはゆがめられたものとならざるをえない。ヘルフォードも指摘するとおりに、二つの種の間での圧倒的な力の差ゆえ、ツガトイによるガンの「受胎」は、あからさまな暴力ではないにしても、強制と感情のコントロールにより行われる、いわば「知人によるレイプ」にも似たものとなる(264)。実際、義務感、ツガトイへの愛、嫌悪、恐怖の中でためらうガンに、ホストになることを決意させるのは、「お前がホストになることを拒否するのなら、お前の姉をかわりに使う」というツガトイの脅しなのである。

あきらかに出産のメタファーである、受胎と、孵化した子供の摘出は、このストーリーの中では、ジェンダーとは極力切り離されている。ホストに男性が選ばれるのは、性的嗜好とはなんら関係のない実利的な理由である。バトラー自身、ラリー・マキャプリーによるインタビューの中で、二つの種族の関係は「共生」という言葉で定義するのがふさわしい、と述べている(56)。(とはいえ、トリクが針のような器官の先を人体に挿入して卵を産みつけ、ホストを「妊娠させる」描写、権力において人類に圧倒的にまさっていること、トリクが生物学的には「雌」であることなどにより、トリクと人類のこの「共生関係」は、人間のヘテロセクシュアルな男女関係が逆転したものとして読めてしまうのだが。)

このように描かれた再生産は、きわめて陰鬱なプロセスである。ホストになることを自ら望むと

すれば、それは強制や感情操作の結果でしかありえない。ガンは、ツガトイの卵を受け入れると決め、それが強制的な取引以上の深い意味を持つ、と自分を納得させようとする。そしてツガトイに、「僕たちの間に関係というものがあるのなら、それにはリスクがつきものなはずだ」と言い、彼女に銃を向ける(28)。現在のところ、もっとも有名な男性妊娠談 SF である「ブラッドチャイルド」が、暴力や、奴隷制さえ髣髴とさせる支配・服従のエピソードに満ち溢れているのは示唆的である。母親という概念と現実が多様になっていったとしても、それは必ずしも解放を伴うものではなく、妊娠させるものとさせられるものの力関係を「再生産」し、「養育」することになりかねないということを、この短編ははからずもあからさまに示している。

ここで、もうひとつ「男性妊娠談」の例として、科学ジャーナリスト、ディック・テレシの「どうやって男を妊娠させるか？」という短いエッセイをあげておきたい。「ブラッドチャイルド」よりも軽い筆致で書かれていながら、SFではなくジャーナリズムであるだけに、またディストピアものやファンタジーというよりは、むしろ常識的なユーモアのつもりで書かれているだけに、いっそうショッキングともいえる例である。テレシは、かつて自分が『オムニ』に書いた、男性の妊娠が可能かどうかということに関する記事が、映画『ジュニア』のアイデアのもとになっていると述べる。『ジュニア』は、アーノルド・シュワルツネッガー扮する科学者が、自らを実験台にして男性による妊娠、出産を成功させる、というコメディである。テレシはエッセイの結びの部分で次のように述べている。

私の記事が『ジュニア』の元になったということを知ったことで、私の人生は変わった。特に、ボディビル専用のスポーツクラブでやっている毎日のトレーニングである。そのクラブには、「初期のシュワルツネッガー」としか名づけようのない、半裸の男性の写真が、聖人の絵姿のように壁を飾っている。私はいつも、その写真の男が私のことを見下ろして、ダンベル相手に悪戦苦闘する私の貧弱な筋肉を、パカにしているような気がしていた。しかし今ではこう考える。「カッコつけてりゃいいさ、アーノルド。お前を妊娠させたのはこの俺なんだ。」(55)

男性的なパワーの象徴のようなシュワルツネッガーを「妊娠させる」ことで、テレシは彼に勝ったと感じ、自分のほうがより「男性的だ」と感じている。映画『ジュニア』自体は、かなりステロタイプのながら、他人と親密な人間関係を築くことができない仕事中毒の男が、妊娠、出産をきっかけに、他人に心をひらき、愛情と養育性をまなんでいく様子を描いていた。しかしテレシのエッセイでは、妊娠する/させる、というのは男としての優位性のあらわれでしかない。そこには、親密な人間関係や愛情への欲望も、子どもが欲しいという欲望すらも存在していない。

あらたな母親モデルを求めて

パトラーやテレシの妊娠する/させる＝支配/服従というモデルではない、肯定的なイメージは存在しないのだろうか。妊娠、出産を、「制度としての母性」から切り離してしまうと、このような陰鬱なイメージしか残らないものなのだろうか。それとも、白人でもミドルクラスでもない母親のイメージの中に、他の可能性が見出せるものだろうか？ハーシュは、『母と娘の物語』で、トニ・モリソンの『ピラブド』と、アリス・ウォーカーの短編「普段使いの品」を母親の言説の例としてあげている。しかし、ハーシュは、彼女が例としてあげた作家が二人とも黒人女性であるということ

の理由について、特に説明を加えていない。ハーシュは、「黒人社会の中で、父親が不在がちであること」および、黒人コミュニティそのものが社会の中で周縁的なものであるため、黒人女性は、男性によって容認される必要がなく、それが黒人女性が母親として創造することの理由になるかもしれない、と述べている(177)。ジョンソンの「頓呼法、生命化、中絶」は、グウェンドリン・ブルックスとルシール・クリフトンを母親の視点から書く詩人の例としてあげながら、やはり二人が黒人作家であることにはほとんどふれず、ただクリフトンの場合について、「黒人女性にとって、赤ん坊を亡くすということは、常に人種皆殺しに加担すること、と見られうる」とのみ説明している(703)。おおむね説得力のある魅力的な読みを展開するハーシュとジョンソンであるが、黒人女性に関するこれらの説明は、歴史的にも正確ではなく、不用意な一般論といわれてもしかたがないだろう。

一方メアリ・ヘレン・ワシントン「私は母の名前を署名する:アリス・ウォーカー、ドロシー・ウエスト、ポール・マーシャル」で、黒人女性には、女性の創造力を支えるような母系的な伝統がある、と述べている。黒人社会では、母親たちはコミュニティの口承文化の担い手であり、書くことはこの伝統の変化した形での継承である。黒人女性の伝統には、さらに、母親と子供の絆を重大なテーマとする、たとえばハリエット・ジェイコブズの『奴隷娘の身におこった出来事』のような奴隷体験記の伝統がある。したがって、黒人女性作家たちは、書くことと母親業が両立しないとは考えない、とワシントンは論じる。

しかし、黒人女性には、白人女性にない伝統があり、そのために母親が創作しても白人のような罪の意識を感じないのだ、と言い切るわけにはいかないのではないか。白人中産階級以外の集団の中に、理想の母親や、母子関係を見出そうとすることは、それ自体危険をはらんでいることも留意しておく必要があるだろう。白人中産階級の母子関係が普遍的な人間関係のモデルではないという合意があったとしても、文化相対主義の名の下に、「異文化」を理想化することも、またその「異文化」の外側、内側のどちらの側に身を置く者にとっても、危険をはらんでいるといわざるをえない。

より具体的にいおう。いわゆる人種的マイノリティの女性の苦境が、いかにしばしば、「文化的相違」や「エキゾチック」の名の下に、見過ごされ、黙認されてきたか。それは一見自らと異なる文化の尊重のようであり、そのグループに属する人々——特に女性——の人権をないがしろにする、蔑視の視線にほかならないことがある。ミッシェル・ウォレスは『強き性、お前の名は』で、黒人男性知識人が、まさにこのような視線で黒人女性をとらえる瞬間について書いている。ウォレスがその男性といっしょにテレビを見ていると、画面におそろしく貧しく、住居も衣服も劣悪で、教育も満足にうけていない状態で、何人もの子供を育てている黒人女性が登場した。その男性知識人は、畏敬の念で頭をたれ、「つよい女だ、このシスターは」と言った、というのである(109)。このとき、この黒人男性は、テレビに映った黒人女性の貧困や、おそらくその原因の少なくとも重要な部分であったにちがいない人種差別、性差別などについてではなく、そのような劣悪な環境の中で生き延びるために要するおそろべき強さのみ注目する。そして、それをブラック・ナショナリズムのレトリック(シスター)をつかって、黒人女性全体、ひいては黒人全体の優秀さを自賛する言説へとしたてているのだが、その際、当の黒人女性の悲惨な現実には抑圧され、不可視なものとなっているのである。

非西洋文明に、理想的な母親のすがたを見出そうとする姿勢は、しばしば、帝国主義文明が、植民地化、人種差別などによってみずから破壊に加担した文化を惜しみ、失われた異文化の過

去の中にこそ、理想的な文化、伝統、生活のスタイルがあったとする、「帝国主義ノスタルジア」の一種にほかならないことすらある。批評家ベル・フックスは、レナルド・ロベルトの『文化と真実』の中のこの概念をつかって、現代アメリカにおいて黒人イメージがどのように白人によって利用されているかを説明しようとする（「他者を食う」25）。非白人の女性は白人の女性よりも母親としてすぐれている、という意見は、帝国主義的な西欧の言説にしばしば見られる。たとえば、ラフカディオ・ハーンの、奴隷制時代のマルチニークを舞台にした長編小説『ユーマ』（1868）を見てみよう。主人公ユーマは奴隷の身分でありながら、奴隷反乱の混乱のさなか、主人のちいさな娘を守って命をおとす、純朴だがやさしく、気高い精神を持った女性として描かれている。語り手は、西インド諸島の女性は、白人の実母よりも小さな子供のよい母親となる、なぜなら、彼女たちの性格はより単純で、こどもっぽく、子供の感情的な要求に、白人の母親よりもよく答えてやれるからだ、と解説をくわえている。

このような見方はハーンだけの奇想だったわけではないらしく、同じころハーマン・メルヴィルは、『奴隷船』の中で、まさにアフリカから拉致されてきたばかりの奴隷を満載した船に遭遇した、白人船長の視点から同じような発言をさせている。

これこそ自然のありのままの姿だ。このような純粋なやさしさと愛情こそが、とデラーノ船長は、きわめて満足してこう考えた。

…船長は他の黒人女たちを以前よりも注意して観察するようになった。彼女たちの立ち居振る舞いは、彼の予想通りのものであった。ほとんどの未開の女がそうであるように、彼女たちは優しい心と頑強な肉体を併せ持ち、赤ん坊のために死ぬことも、赤ん坊のために戦うこともいとわぬ様子だった。雌豹のように荒削りであり、また雌鳩のように愛情深いのである。おお！デラーノ船長は考えた。おそらく、レドヤードがアフリカで目撃し、高貴なものたちだとして賞賛した、まさにその女たちもその中に混じっているのであろう。（1378）

もっとも、『奴隷船』の場合には、白人船長の独白は皮肉な効果を生んでいる。「赤ん坊のために戦う」というあたり、メルヴィルらしき不吉な前兆がしのびこんでいるとはいえ、語り手の白人船長は、黒人の母親をひたすら単純でほほえましい姿としかとらえられず、奴隷による白人船員の虐殺および奴隷船乗っ取りに土壇場まで気付かない、かなり鈍感な人物である。彼の黒人観が紋切り型であり、真実を見えなくさせてしまう虚偽であることは読者には明らかである。

現代でも、異文化の中に、理想的な母親像がまだ手つかずで存在するのではないか、西洋文明にないオルタナティブが発見できるのではないか、というロマンチックな理想化は、異なった文化の間の相互理解をもたらす、というよりは、マイノリティのさらなる周辺化、マイノリティ女性のステロタイプ的な見方の強化という結果になりがちであろう⁴。黒人女性や、そのほかのマイノリティに属する女性の手になる「母親の言説」が比較的多くみられるといっても、そのことがすなわち、彼女たちがより一環性のある、一枚岩的な「母親としての自己」を、白人女性よりも構築しやすいわけではない。むしろ、マイノリティの女性、なかでもマイノリティの母親は、自己意識の分裂へと、白人女性よりも容赦のない力でおいやられているともいえる。彼女たちが白人女性作家に先駆けて、母親的言説を使いこなしているとすれば、それは彼女たちの文化の特殊性ばかりでは説明できず、またそうすることは適切ではないだろう。むしろ、現代に普遍的な状況を、マイノリティ女性であるがゆえにいち早く、敏感にキャッチし、表現しているということが多

いに考えられる。実際、多くの批評家たちは、非白人女性作家のなかに、いわゆるポスト・モダ
的な状況を、よりくまなく、そして野心的に描いている作家が多いことを指摘している⁵。

ポストモダン・マザーフッド

ポストモダンといえば理論、創作ともに白人男性のもの、と見られがちなのだが、じつのところ、非白人女性が過去20年ほどのあいだに次々と作り出してきたのは、ポストモダンのアメリカ文学の、最良の、そしてもっとも野心的な例ともいえる。白人批評家は、ポストモダンというとジョン・バース、トマス・ピンチオン、ドナルド・バーセルミといった名前をあげてきたわけだが、実はポストモダニズムとは、周辺化された文化、たとえばマイノリティや、労働者階級、それに女性などの文化を理解するのに役立つコンセプトであり、またそのような人々の作品や理論が、ポストモダニズム理解にとって重要であることが近年くりかえし指摘されてきている。

たとえば、黒人女性批評家ベル・フックスは、エッセイ「ポストモダンの黒さ」で、ポストモダン批評はアメリカ黒人の経験や文化を理解するのに重要な概念であるとして重要性をみとめ、「ポストモダニズムの影響とは、全体としていえば、黒人以外の多くのグループがいまや、根深い疎外感、絶望、不安定な感覚、確固たる地盤が失われたという感覚を、共通の状況によって与えられたのではないにもかかわらず、黒人と共有しているということ」と述べている。(27)。その一方で、フックスは、「差異」や「他者性」を概念としては重要視する一方で、アメリカ黒人、特に黒人女性の存在や業績を無視し、「仲間うちの符丁をつかって、内輪で気安く語り合う」白人男性批評家たちを痛烈に批判する(24)。そしてラディカルなポストモダニズムは「居場所を奪われ、周辺化され、搾取され、抑圧された黒人の声」を自らの一部分として持っているべきだ、と主張する。

フックスと同様、フィリップ・ブライアン・ハーパーは、『周辺の枠組：ポストモダン文化の社会的ロジック』で、ポストモダン文学を理解するために重要な要素として人種、階級、ジェンダーに注目する。ハーパーは、いわゆるポストモダンの特徴、すなわち、断片化や脱中心化などを最も激しく体験し、また先鋭に表現してきたのは、女性であり、黒人であった、という観点から、アナイス・ニン、ラルフ・エリソン、グwendolin・ブルックスの諸作品を分析していく。ハーパーによるブルックスの詩「ミシシッピの母親がベーコンを焦がし、ブラウンズヴィルの母親はさまよい歩き」および、小説『モード・マーサ』の解釈は、「母親の言説」という本論文のテーマにとってきわめて示唆的であるので紹介しておきたい。これらの作品は、人種の壁をこえて普遍的な「母親」としての体験や心情が表現されているもの、母親としてのアイデンティティという共通項により、黒人女性が白人女性と連帯できる可能性を示唆したもの、と解釈されることが多かった。しかし、ハーパーは、「ミシシッピの母親」では、ブルックスは黒人と白人、ふたりの母親を並べて描写してみせることによって、「合衆国における社会体制の中で、さまざまな主体を形成する経験の多様性と、独自性」がむしろはっきりと見えてくると主張する。(103)。

『モード・マーサ』でも、主人公モードの怒りは、すべての母親に共通するものであるかのように一見描かれている。それは、クリスマスの買い物客でにぎわうデパートで、サンタクロース(に扮したデパートの従業員)が自分の幼い娘を無視した、ということに対する怒りだからである。母親としてのモードの自己は母親であるがためにすでに分裂している。母親の怒りは「自分ではなく、自分以外のだれかに関するものであるかぎりにおいて、表面化することを許される」か

らである(ハーパー、114)。しかし、その怒りは単に母親としての怒りであるだけではなく、黒人であることとも切り離せない。なぜなら、それはサンタクロースが他の子供たちにはやさしく、愛想よく話しかけるのに、黒人であるモードの娘だけを無視するという、人種差別に対する怒りでもあるからだ。またそれは、社会の主流をなす経済のしくみ、つまり自分を抑圧する制度そのものに、受身の消費者として参加することを認めてほしいという欲望、というきわめて穏健な形でのみ表現されている(ハーパー、115)。つまり、『モード・マーサ』のこのエピソードは、母親として普遍的な体験や感情であるどころか、人種、階級によってさらに分裂し、脱中心化された自己の表現と読むことが妥当である。

母親の自我、特に非白人女性の母親としての自我が、このような分裂した自己表現を強いられるとしたらどうだろうか。マイノリティ女性は、どのようにして「母親である自分が子どもの運命に全面的に責任を負う」という重圧感をのりこえ、罪悪感や子殺しファンタジー以外の表現を可能にしていくのだろうか。芸術家が、表現する自己を「子供」として認識する伝統のなかで、母親の声はどのようなモデルにしたがって発せられるのだろうか。ジェーン・フラックスは、『断片を考える：現代西洋世界における精神分析・フェミニズム・ポストモダニズム』で、「中心の核となる自己を持ってない」境界線シンドロームの患者に言及しながら、「それがなくては、わたしたちは、自分というものや他者のさまざまな経験を認知することも、そこから喜びをえることもできないし、外界というものの存在すら不可能になる」と述べている。このような観点からフラックスは、自己の分裂や脱中心化をよいことのようにもはやすポストモダン批評家を「自己欺瞞的にナイーブ」である、と批判する。フラックスによれば、自己や他者における差異を認識し、保留する場所、分裂を経験するためには、「核となる自己」が必要不可欠だからである。(218)。母親の言説は、自分自身の内部に存在する多様性や分裂を隠蔽することなしに、このような「核となる自己」を保つことができるのだろうか。

母親の言説——母なる神を求めて

現代アメリカで、新しい種類の母親の言説をつくりだしている作家たちのうちでも、特にマキシ・ホン・キングストン、トニ・モリソン、レズリー・マーモン・シルコウの三人は重要である。彼女たちの諸作品は断片化され、脱中心化された現代社会の現実を表象しながらも、統一のとれた世界観、しかし一枚岩的でない世界観をつくりだしている。三人の作家としての活動はすでに30年以上にもわたり、著作もかなりな分量にのぼっているが、キングストンの『トリップマスター・モンキー』、モリソンの『パラダイス』、シルコウの『死者の暦』が、母親の言説、という観点から特に注目に値する。

これらの作品には、「母親の言説」がかなり意図的に用いられ、そしてそれが効果をあげている。「母親の言説」を定義しておこう。この言葉をここでは、おもに二つの意味で用いたい。すなわち、母親の観点から書かれた、母親についての物語であるということ。これは、母親のさまざまな様相を、わが子を虐待したり、捨てたりする行為もふくめ、平板で一面的な道徳的糾弾や「病理」の烙印に還元することなく描き出すことができる。母親のふるまいは、文化的、歴史的、政治的な要因によって重層的に決定されるし、また特定の個人の性格の傾向によっても影響するだろう。したがって、さまざまな母親の物語を書くこと自体が、今日の社会の断片化、脱中心化を強力に示すこととなろう。

次に、「母親の言説」とは、権威のある女性、それも、ただ他の登場人物に対してなんらかの権力を持つ女性というだけではなく、象徴的な意味で権威を持つ女性——女神——に基づく、権威ある女性の言説をさす。キングストン、モリソン、シルコウは、それぞれ、権威としての母親を登場させることにより、分裂し、混沌とした現実を作中で再現し、なおかつそれを統一された形でまとめることのできるナラティブを作り出している。母親を権威として呼び出すことによって、母親的言説は、分裂した現実には、統一されたビジョンを与える。これらの作家たちが作中で呼び起す女神は多神教の出自を持つため、母親的言説は、差異を塗り隠したり抑圧したりせず、また直線的で一枚岩的な、マスター(＝一神教／家父長的)・ナラティブになる必要もない。

それぞれの作家がどのように母親的な言説を駆使するかについて具体的にみていく際に、精神的、宗教的なシンボルとしての「母親」という概念が、近年のフェミニスト批評において、どのように論じられてきたかを抑えておく必要があるだろう。象徴としての母親、とりわけ女神という形をとったものは、西欧にも長い伝統があり、その定義や含意もそうとうな伝統の厚みと多様性を持っている。しかしながら、母親的な女神は、豊饒、養育性、優しさなどと結び付けられてはきたものの、必ずしも権威や権力の象徴とはならなかった。そのような女神をエンパワメントの根拠としようとする女性は、限られた範囲でしかそれが可能ではないだろう。そのような観点から、宗教的な女性シンボルをエンパワメントや言説の権威として利用することを警戒する知識人は多い。

たとえば、文化ジャーナリストのマリーナ・ウォーナーも、宗教的象徴としての聖母マリアの重要性を歴史的に概観した『女性の中でただひとり：聖母マリアの神話とカルト』で、聖母マリアという象徴的な母親は、女性に母親的であり、同時に性的に未経験であれ、という不可能な要求を押し付ける手段となりはてており、過去はいざしらず、現代では女性の支えとなってくれる理想像としての役目をおえた、と結論付けている。ウォーナーは、「彼女の神話が記述しているような現実も過去のものとなった。彼女に体現されている道徳的規範は、すでに役目を終えた」、したがって、「イシュタルと同様、聖母マリアも、伝説の中へと退いていくことだろう」と述べている(338-9)。

その一方で、母親をめぐる言説が、身体性や、感情面での体験などに限定されがちで、精神的、象徴的なレベルについて論じられていないことも指摘されてきた。家族の問題を主に論じる批評家、たとえば哲学者のセアラ・ラディックは、「父親」を論じる際には地位、象徴、権威、権利、について論じられる一方、母親を論じる際には身体性、授乳、液体、母の身体、などを論じがちである、ということについて批判的に指摘している⁵。「母性の理想と現実：神学的視点」で、ポニー・J. ミラー＝マクレモアは、われわれは母親体験の中の精神的、宗教的部分にもっと関心をはらうべきだ、と主張する。ウォーナーは、聖母マリアの体現する理想がいかに女性嫌悪的であるかを指摘し、理想の母親像としては不適切である、と切って捨てるが、ミラー＝マクレモアは、キリスト教は女性にとって有害な、紋切り型の母親像を支持してきたことは認めるとしても、実際に女性にとって、キリスト教がどのように影響を与え、またそこから女性たちがどのように精神的支えをひきだしてきたか、を無視するべきではない、女性がなんらかの宗教的な理想像をよりどころとして必要とすることにフェミニスト研究者はより注意を払い、宗教そのものを反動的で、女性差別的である、として否定してはいけない、と主張する。文学研究の分野においても、たとえばジェイン・シルヴァーマン・ヴァン・ビューレンは、『モダニスト・マドンナ：母親的メタファーのセミオティックス』で、前エディプス期の母子関係の重要性を強調し、シンボルとしての母親

の重要性、特に19世紀の女性作家たちにとっての「母なる神」というイメージの重要性を強調する。

宗教的な女性イメージ、特に母親的なイメージを、家父長制の枠組みの中の母親像にとりこまれることなく、権威ある存在として思い描くことはできないのだろうか。リュス・イリガライはこの問題について、「神的な女性」というエッセイによって、独自の境地を切り開いたといえる。その中でイリガライは、ルトヴィグ・フォイエルバッハの『キリスト教の起源』に依拠し、かつフォイエルバッハの「神」が実のところ男性に特化されていることに着目して、女性が完全な主体を手に入れるため、またジェンダーの平等をもたらす社会的な変化を起こすためには、女性は女性のイメージにもとづいた神、すなわち母なる神、娘、精霊の三位一体を持つ必要があると主張する。

イリガライの女神を求める主張はフェミニズム思想家、宗教思想家などから賛否両論の反応をひきおこした。⁶ しかし、それは象徴レベルで、現状の家父長制を転覆する可能性へとわれわれの想像力を刺激する力を持っている。イリガライは、この「母なる神」について、具体的なオルタナティブを提示せず、聖母マリア以外にそれを見出せる場所の可能性についても提示していない。女神に対する彼女の欲望は、しかしながら、多くのフェミニストによって共有されてきている。近年あいまいな「女神信仰」ということばで一まとめに呼ばれるものも、その一部分ということができるだろう。

「女神信仰」は学問的にはうたがわしいものとして、批判、嘲笑の対象となってもきている。このような蔑視はたとえばブルース・ソートンのエッセイ「偽の女神とその失楽園」にみることができる。ソートンは「女神信仰」は30代、40代の白人中産階級のレズビアンに多く、ニューエイジ系の「センセーショナルな三流ジャーナリズム程度の知性レベル」のしるもの、と決めつけている。(78)。シンシア・エラーの『女神の元で生きる：アメリカにおけるフェミニストの精神世界運動』では、「新異端主義、政治的フェミニズム、ユダヤ教およびキリスト教フェミニズム、ニューエイジ、アメリカ先住民スピリチュアリティ」がひとくりに「フェミニスト精神世界運動」として批判の対象となっている(ix)。前史時代のヨーロッパにおける女神信仰を復活させようとする動きなどに対する批判は、既成宗教のオルタナティブとしての「神的な女性」を希求したいという女性の欲望に同情的なフェミニスト研究者の間にもみられる。たとえば、カトリック神学者ローズマリー・ラドフォード・ルーザーは、『女性の導き：フェミニスト神学のためのアンソロジー』で、自分自身の宗教的伝統とはかけはなれたところに答えを見つけようとする態度のリスクを指摘している。彼女はまた、何も無いところから、まったく新しい神をつくりだすことはできないのだ、とも主張する(xi)。メアリー・ジョー・ウィーバーは、「女神とは何か、われわれに何の役にたつのか？」で、「女神信仰」運動とされるさまざまな動きの問題点を指摘する。しかしながら、女神信仰の実践や教義について調査したウィーバーは、自分自身では女神信仰を実践するつもりはないといながらも、既成の組織化された宗教へのラディカルな批判であること、日々の生活において宗教の重要性を受け入れていること、理想主義、などを評価している。ウィーバーら、それぞれ自らが信仰を持ち、かつ女神信仰に批判的な意見を表明しているフェミニスト研究者でも、異なった宗教に対して寛容であり、さまざまな信仰を持つ女性同士がフェミニスト的な連帯の可能性のあることを前向きに捕らえていることは重要である。

同じように、キングストン、モリソン、シルコウは、彼女たちの世界の中で、自分自身の宗教、それ以外のさまざまな宗教、どちらにも、寛容な姿勢をとる。彼女たち全員が、非白人の文化や

「精神世界」の白人主流の文化による安易な受容や商業化、搾取の問題点を意識している。しかし、彼女たちは、伝統的な宗教や本物の儀式は、部外者にはアクセスも理解もできない、と否定してしまうのではなく、場合によってはいかにわしい模倣者や浅薄な精神世界かぶれの人々をも取り込んでしまうような、寛容で包括的な象徴的秩序を描き出している。そのために中心となるのが、宗教的権威をおびた、母親的存在——すなわち女神——なのである。

キングストン、モリソン、シルコウは、イリガライがアイデアを提唱しながら、具体的な例を提示しえなかった、神的な女性というイメージを作り出すことに成功している。イリガライは、女神が「自然の豊饒さ」や「原始社会」とむすびついているという理由で、既成の女神を利用することをさけていた(81, 87)。しかしキングストン、モリソン、シルコウは、そのような文化的な限界をこえ、神的な女性、いやむしろ、複数形の神的な女性たちが、女性にとっても、男性にとっても、精神的、社会的な生活の根底に存在するような、社会のビジョンをつくりだしている。

キングストンは、中国の宗教や民間信仰にのっとり、また中国の古典文学をベースに創作する。キングストンは中国系二世でカリフォルニア出身、60年代にカリフォルニア大学バークレー校で文学を専攻しており、彼女の立脚する文化そのものがマルチカルチュラルである。キングストンは中国系アメリカ人の文化のさまざまな側面から、女性の精神をサポートし、涵養する部分、女性の権威を正当化する部分を抜き出し、利用している。彼女の作品において、観音菩薩は、母親的な権威を持つ神として特に重要である。モリソンは、イレイン・ペイゲルズなどの最近のキリスト教歴史学の成果をいかして、アメリカの黒人キリスト教と古代キリスト教の多神教的な要素の融合をはかり、また同時に、アフリカ起源のブラジル宗教、カンドンブレをも自らの作品世界にとりいれている。モリソンの作品においては、多神教カンドンブレの中でも特に、カトリックとの対比において聖母マリアになぞらえられる女神イエマンジャが重要である。ラグナ・ブエプロ族のシルコウは、自らの伝統宗教に、母親的な女神を見出す。シルコウの描く世界は先住民の視点が一貫して支配的であり、そこではヨーロッパ人の侵略と、白人による土着宗教の搾取、ニューエイジ型の商業化なども含め、すべてのできごとは先住民の目から見た歴史観、すなわち、いったんは略奪されたアメリカの大地が、いずれは先住民によってとりもどされ、ヨーロッパ的なものは滅びていく、という予言成就の一部分をなすものとして捉えられている。シルコウのグローバルで黙示録的な世界は、多様な民族、階級、言語からなる様々な人々からなりたつ断片的なものであるが、それを包括し、支配するのは、「母なる大地」と呼ばれる母親的な女神なのである。

おわりに——「権威ある母、平和的な父、強力な女神」を求めて——

強い母親、女神が登場する作品で、父親はどうなるのか？家父長がいなくなり、父なる神もいなくなったとしたら、父親や、父親的な存在はどうなるのか？キョン・ヒー・チョイは、帝国主義と母性を扱った『植民化された母親が語るとき』トニ・モリソン、パク・ワンソ、プチ・エメチエタ』において、ポストコロニアル文学における母親的言説が、父親不在、あるいは父親は存在しても機能していない状況をえがき出していることを指摘する。植民地化された社会の家族では、夫や父親が不在である理由にはことかかない。抵抗運動に加わり、地下に潜伏しているかもしれないし、死亡、行方不明、投獄中という場合もある。被支配階級に属する男であるがゆえの経済的その他の逆境に耐えられず、家族を守る責任から逃れて行方をくらましてしまったかもしれ

ない。または、家父長であるにもかかわらず家族に経済的、身体的安定を与えられないことに耐えられず、精神的に機能不全になっているかもしれない。チョイが描くさまざまな父親不在状況でとくに重要なのは、男性は家父長になれない場合には父親として存在することも同時にやめてしまう、という点である。ダニエル・パトリック・モイニハンのいわゆる「モイニハン報告」は、アメリカ社会における黒人の貧困、犯罪率の高さなどが、黒人家族が「母権制」であり、男性に適切なモデルがないことが原因である、として大論議をまきおこしたが、この説に単純に賛成する者は現在ではそう多くないにしろ、マイノリティに属する男性が、白人中産階級の男性よりも、「男としての責任」を果たそうとした場合に感じるプレッシャーはより多く、したがって、家族が「父親不在」になる可能性もまた多いといえよう。⁷ 多くのフェミニスト研究者は、「父性」を権力や経済力と同一視することは、マイノリティや貧困層に属する男性にとって、「父性」が手のとどかないぜいたく品となることであり、したがって自分の無力さをあからさまにしてしまう女や子供に対して男性が敵意を向ける原因となると指摘している。ミッシェル・ウォレスはこのメカニズムを『強き性、お前の名は』で分析し、ブラック・パワー運動が挫折した原因のひとつは、それが黒人男性が「男性性」を獲得することに力点をおきすぎたことであり、しかも「男性性」とは往々にして、男性が女性を支配する力と同一視されたので、女性を運動から疎外してしまったことである、と述べる。マイノリティの理想とする父親像とは、したがって、アメリカの主流文化が前提としてきたような、そしていまだに理想とあおぐような、経済力を含む権力を持ち、その力を行使することによって家族に愛情を示しかつ支配するような家父長ではないはずである。

ラディックの『母親的思考：平和のための政治をめざして』は、「母親」を「こうあるべき、という理想像」として定義するのではなく、責任を持って子供を育てるときに要求される仕事、という観点で定義することを提唱する。つまり、ある子供を育てるために必要な時間、エネルギー、経済的負担、などを責任を持って引き受ける成人は「母親」と定義される。この定義にしたがえば、「母親」は子供と生物学的につながりがなくてもいいし、特にふさわしい年齢もなく、女性である必要さえない。子育てする男性もまた「母親」であり、義務めきのステータスと権利をあらわす「父親」という概念はもう必要ない、とまでラディックは言い切る。またマーサ・アルバートソン・ファインマンは、『家族・積みすぎた箱舟』で、ラディックの提案にもとづき、法、福祉政策の観点から、家族というものを、成人カップルを基準にした夫婦と子供という単位で考えるよりは、母親を中心に、母親と子供、というタテの形を単位として考えたほうが現実的である、と提唱する。つまり家族の中に男性がいた場合は、それは母親のパートナー、兄弟、子供、等と定義されることになるというわけである。そのような家族観こそが、権威ある母と平和的な父が共存するモデルを提供する、とファインマンは主張する。

彼女らの提唱に全面的に賛成するかどうかはともかく、誤解のないように念おしておく、二人の「父親不要論」は、子育てや家族で成人男性は必要ない、あるいは望ましくない、ということをもって意味しない。むしろ、家族とのかかわりの中で、権威や支配にたよらない、しかも無責任でない新しいモデルをつくりだそうとする試みといえる。キングストン、モリソン、シルコウもまた、父親をしめだすのではなく、新しい形の父親像を描こうとしている。また彼女たちは、「父なる神」とってかわって唯一絶対の権力をにぎる「母なる大地」が支配する社会を描こうとしているのではない。ファインマンの表現をかりれば、「権威のある女性、平和的な男性、強力な女神たち」の存在するような社会をまさにフィクションの世界で実現しようとしているのである(157)。

キングストン、モリソン、シルコウはそれぞれ、このような共通点を持つわけであるが、それと同時に、文化的、歴史的な背景の違い、作家としての個性の違いから、さまざまな異なった点があることも自明である。キングストンの『トリップマスター・モンキー』は、中国文化の伝統を受け継ぐ作家の小説らしく、3人の中でもっとも包括的であろうとする。この傾向を彼女は、ウォルト・ホイットマンを代表とするアメリカ文学の包括的な伝統へとむすびつけ、二つの文化の両方にねざした作家としての自らの地位を確立させている。『トリップマスター』はまた、3つのなかでもっとも平和主義的な作品でもあり、これはキングストンの反戦活動家としての思想の反映でもある⁹。モリソンもまた、アメリカ黒人文化の伝統にのっとりながらも、同時に自らがアメリカ文学、さらには西洋文学の伝統の中で創作していることを、聖書やアメリカ植民地時代の文献といった、アメリカ文化の原型的な文書を意図的になぞり、書き換えることにより示している。モリソンの作品では、「人種」がコミュニティにとっても、個人にとっても、極めて重要な要素となる。モリソンの描く母親的な権威は、アメリカ社会の多様性に対して包括的で寛容ではあるが、同時にきわめて人種的に限定されたものとなっている。

シルコウの描く母親的な権威は、一見きわめて矛盾にみちている。つまり一方では、多様性に寛容で慈愛にみちているが、同時に先住民のための正義を要求し、戦闘的ですからあるからである。シルコウの作品世界の中では、「アメリカ合衆国」という国家の枠組みですら、限定された重要性しか持たない。登場人物の中には、合衆国とメキシコの国境そのものを認めない者すらいる。その世界の中では、先住民は500年間の長きにわたり、侵略国家であるアメリカ合衆国とゲリラ戦を続けており、平和主義や戦争放棄をオプションとして選択する余地ははなから存在しないのである。母親的な権威は、愛し合い、平和に暮らすように人々に告げる一方で、生存と正義のために戦う根拠を人々に与えている。

キングストンのヴィジョンが、彼女の平和主義思想と反戦活動を反映している一方、モリソンのヴィジョンは、紛争のメカニズムに焦点をあてている。ジェームズ・マーカスとのインタビューで、モリソンは、『パラダイス』のタイトルを最初は『戦争』にしようと思ったが、編集者の意見を聞いて『パラダイス』に変更した、と述べている。彼女の言う「戦争」とは、同時に進行するさまざまな紛争をすべてさしていると考えてよいだろう。ベトナム戦争を背景に、小さな黒人コミュニティの内部での男性と女性のあらしい、世代間の対立、そして、父権的なコミュニティと女性ばかりが共同生活をするコミュニティの対立。母親的な権威は、これらの扮装をおさめ、争いの只中にいる人々に自らの状況を気付かせ、救済への道をひらくが、紛争それ自体を防ごうとするものではない。

キングストンの作品がユートピア的であり、モリソンの作品がよりリアリスティックであるならば、シルコウのヴィジョンはディストピア的、というべきかもしれない。シルコウは、自分の所属する文化が、俗世的にも、宗教的にも、女性の権威を支持すると断言する。先住民が、現代アメリカ社会の政治・支配体制と対立する姿勢を支持する以上、彼女の作品に登場する女性的権威は、武力レジスタンスや流血をもまた支持することになってしまう。シルコウの作品世界で平和と調和にみちた未来は求められるにしろ、それはキングストンの描く世界のように、明るく、祝祭的な気分の中で到来することはありえない。シルコウのビジョンはまた、アメリカ合衆国や特定のコミュニティに限定されることなく、現代の経済や政治のグローバル化を反映して世界規模なものとなり、その中で大規模な暴力や殺人が恒常化している現実が否応なく描き出されていくのである。

1 フェミニスト的言説における、母親や、母親的存在に対する反発や敵意については、ハーシュ（164-7）を参照。ジェーン・フラックス「母・娘関係およびフェミニズム内部における養育性と自立の葛藤について」は、フェミニスト批評内部における、娘の母親に対する敵意の表象を指摘した初期の例である。フェミニスト研究における娘（子供）中心主義に対する批判としては、ジェーン・ギャロップの「母語を読む：フェミニスト精神分析的批評」を参照のこと。

2 この事件の詳細に関しては、フィリス・チェスラー『代理母』（1988）を参照のこと。

3 ステファニー・クーンツ『存在しなかった過去——アメリカの家族とノスタルジアの罫』を参照のこと。現代家族の人間関係について考察する中で、クーンツは、代理母契約においては、契約した側の母親もまた、子供を望み、9ヶ月子供の誕生を待ち受けるという意味で、「妊娠した母親」（期待・妊娠はどちらも英語で *expectant*）といえる、と述べている。つまり、女性もまた、身体よりも観念を上位におくことによって利益を得る場合もありうるということを示している。しかしながら、女性がこのように利益を得るのは、それが男性によって認められている願望（この場合は、夫に子供を持たせてやりたいという既婚女性の願い）に限られる、とヴァレリー・ハルトウーニは皮肉をこめて指摘している。

4 スーザン・モラー・オーキンの「多文化主義は、女性にとって害となるか？」を参照のこと。オーキンの主張、すなわち異文化に対して寛容であろうとすることが、その文化の中に生きる女性の人権侵害に目をつぶる結果になってはいけない、という主張それ自体には説得力がある。しかし彼女が例として持ち出した、サンタモニカでの日本人女性が子供二人と無理心中をはかった事件（子供は二人とも死亡し、母親は助かったが子殺しの罪で有罪判決を受けた）について、「女性は男性の付属物とされ、男性のしでかした不始末（この場合は、夫の浮気）は、妻と子供が自分を犠牲にしてつぐなわなければならない」という説明はどう考えても納得できるものではない。夫の浮気による精神的動揺、というあたりまえの説明よりは、「日本文化はアメリカ文化よりも女性蔑視である、そして恥を重んじる」という説明をとったあたりに、オーキンのステロタイプに基づく日本女性についてのファンタジーに足をとられた部分が垣間見え、全体としての説得力を弱めてしまっている。

5 マイノリティ女性とポストモダニズムに関しては、拙稿 “Postmodern Motherhood and Ethnicity : Maternal Discourse in Late Twentieth Century American Literature” を参照のこと。

6 エイミー・ハリウッドは、「神的な女性・神的な女性たち：バタイユ、ラカン、イリガライにおける神聖なるものの帰還」で、イリガライの業績に関心を持つ者の間でさえ、女神の必要を唱えるイリガライの主張には関心が払われてこなかったことを指摘する。ハリウッドによれば、この無関心は、宗教という無条件に受け付けない女性研究者の間の風潮による（224）。ハリウッドはさらに、イリガライの主張を擁護する、たとえばエリザベス・グロツらにしる、イリガライの構築主義の側面を強調し、イリガライは「無条件の信仰を押し付けているわけではない」と主張したり、イリガライの女神を求める主張を「非政治的な宗教性」への逆行ではない、とするなど、イリガライの宗教的側面については否定的である、と指摘する（226）。一方、セレーン・ジョーンズのようなフェミニ

スト神学者の中には、イリガライの、神が「自我の理想像」である、という宗教観があまりにプラグマティックであることに対する困惑が見られる。ジョーンズは、イリガライの神と人間との関係の捉え方には「真の超越性」がない、とし、さらにそうすることでイリガライは自分自身が批判している男性的な、即物的構造をなぞっている、と批判する（138-9）。

⁷ここで念のために付け加えておくと、父親不在はマイノリティや植民地コミュニティだけの現象ではない。不在の父親、いることはいるが、子供に無関心で、子どもと向き合わない父親という現象は、白人中産階級でも問題視されてきた。スーザン・ファルーディの『スティッフド：アメリカ男性の裏切り』は、今までの理想の父親像が、白人男性にすら役に立たないものとなっていることをさまざまな事例やていねいなインタビューによって明らかにしていく。ファルーディによれば、現代アメリカ人男性は、現実の家族の中に自分がモデルとしたいような父親を見出せなくなり、理想の父親像を軍隊、プロ・スポーツ、映画のヒーロー、キリスト教系の男性運動などに見出そうとする。しかしそれらの中にも理想の父親は見出すことができず、彼らのフラストレーションは往々にして、女性に対する敵意や暴力という破壊的な形をとるというのである。

⁸ キングストンのヴェトナム反戦活動については、たとえば、ネイラ・C. セサチャリによるインタビューがある（195,96）。またキングストンは2003年9月にホワイトハウス前で反戦活動中逮捕され、短時間ではあるが拘留されたが、これに関してはたとえばこの反戦活動を組織した女性平和団体「コード・ピンク」のホームページ（<http://www.codepink4peace.org/>）等を参照のこと。

参考文献

- Butler, Octavia. "Bloodchild" *Bloodchild and Other Stories*. New York: Four Walls Eight Windows, 1995. 1-29.
- . Afterword. "Bloodchild" by Butler. 30-32.
- . "An Interview with Octavia Butler." Interview with Larry McCaffery. *Across the Wounded Galaxies: Interviews with Contemporary American Science Fiction Writers*. By Larry McCaffery. Urbana: U of Illinois P, 1990. 54-70.
- Chernin, Kim. *The Woman Who Gave Birth to Her Mother*. New York: Penguin, 1998.
- Chesler, Phyllis. *Sacred Bond: the Legacy of Baby M*. New York: Times Books, c1988
- Choi, Kyeong-hee. *When a Colonized Mother Speaks: Post-Colonial and Maternal Narratives of Toni Morrison, Pak Wanso, and Buchi Emecheta*. Diss. Indiana U, 1996. Ann Arbor: UMI, 1998.
- Coontz, Stephanie. *The Way We Never Were: American Families and the Nostalgia Trap*. New York: Basic Books, 1992
- Faludi, Susan. *Stuffed: The Betrayal of the American Man*. New York: William Morrow, 1999.
- Farquhar, Dion. *The Other Machine: Discourse and Reproductive Technologies*. New York: Routledge, 1996.
- Fineman, Martha Albertson. *The Neutered Mother, the Sexual Family, and Other Twentieth Century Tragedies*. New York: Routledge, 1995.
- Flax, Jane. "The Conflict between Nurture and Autonomy in Mother/Daughter Relationships and within Feminism." *Feminist Studies* 4.1(1978): 171-89.
- . *Thinking Fragments: Psychoanalysis, Feminism, & Post-Modernism in the Contemporary West*. Berkeley: U of California P, 1990.
- Friday, Nancy. *My Mother/My Self: the Daughter's Search for Identity*. New York: Delacorte, 1977.
- Gallop, Jane. "Reading the Mother Tongue: Psychoanalytic Feminist Criticism." *Critical Inquiry* 13.1, 1987. 314-29
- Gilbart, Sandra and Susan Gubar. *Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- . *No Man's Land: The Place of the Woman Writer in the Twentieth Century: Volume 3: Letters from the Front*. New Haven: Yale UP, 1994.
- Harper, Phillip Brian. *Framing the Margins: The Social Logic of Postmodern Culture*. New York: Oxford UP, 1994.
- Hearn, Lafcadio. *Youma: The Story of a West-Indian Slave*. New York: Harper, 1890.
- Helford, Elyce Rae. "'Would You Really Rather Die Than Bear My Young?'" The Construction of

-
- Gender, Race, and Species in Octavia E. Butler's 'Bloodchild'." *African American Review* 28.2 (1994): 259–71.
- Hirsch, Marianne. *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism*. Bloomington: Indiana UP, 1989.
- Hollywood, Amy. " 'Divine Woman/ Divine Women' : The Return of the Sacred in Bataille, Lacan, and Irigaray." *The Question of Christian Philosophy Today*. Ed. Francis J. Ambrosio. New York: Fordham UP, 1999. 224–246.
- hooks, bell. "Postmodern Blackness." *Yearning: Race, Gender, and Cultural Politics*. Boston: South End, 1990. 23–31
- . "Eating the Other." *Black Looks: Race and Representation*. Boston: South End, 1992. 21–39.
- Irigaray, Luce. "Divine Women." *Sexes and Genealogies*. Trans. Billian C. Gill. New York: Columbia UP, 55–72.
- Johnson, Barbara. "Apostrophe, Animation, and Abortion." Robyn R. Warhol and Diane Price Herndl, eds. *Feminisms: An Anthology of Literary Theory and Criticism*. Rev. ed. New Brunswick: Rutgers UP, 1997, 694–707
- Jones, Serena. "This God Which Is Not One: Irigaray and Barth on the Divine." *The Question of Christian Philosophy Today*. Ed. Francis J. Ambrosio. New York: Fordham UP, 1999. 109–141.
- Kingston, Maxine Hong *Tripmaster Monkey: His Fake Book*. 1989. New York: Vintage, 1990.
- . "Reinventing Peace: Conversations with Tripmaster Maxine Hong Kingston."
- Interview with Neila C. Seshachari. Skenazy and Martin, 192–214.
- Melville, Herman. Benito Cereno. 1855. Gerge McMichael, ed. *Anthology of American Literature*. 3rd. ed. Vol. 1. New York: Macmillan, 1985. 1356–1410.
- Miller–McLemore, Bonnie J. "Ideals and Realities of Motherhood: A Theological Perspective." *Mother Trouble: Thinking Contemporary Maternal Dilemmas*. Eds. Julia E. Hanigsberg and Sara Ruddick. Boston: Beacon, 1999.
- Morrison, Toni *Paradise*. New York: Knopf, 1997.
- . "This Side of Paradise." Interview with James Marcus. <<http://www.amazon.com/exec/obidos/tg/>
- Reuther, Rosemary Radford. *Womanguides: Readings toward a Feminist Theology*. Boston: Beacon, 1985.
- Ruddick, Sara. *Maternal Thinking: Toward a Politics of Peace*. Boston: Beacon, 1995.
- . "Thinking about Fathers." Hirsch and Keller 222–233.
- Silko, Leslie Marmon. *Almanac of the Dead*. 1991. New York: Penguin, 1992.
- Stumpf, Andrea E. "Redefining Mother: A Legal Matrix for New Reproductive Technologies." *The Yale Law Journal* 96.167 (1986): 187–208.
- Sugiyama, Naoko. "Postmodern Motherhood and Ethnicity: Maternal Discourse in Late

-
- Twentieth Century American Literature." 2000, *The Japanese Journal of American Studies* 11, pp.71-90.
- Suleiman, Susan Rubin. *Risking Who One Is: Encounters with Contemporary Art and Literature*. Cambridge: Harvard UP, 1994.
- Teresi, Dick. "How to Get a Man Pregnant: My True Adventures on the Frontiers of Science." *New York Times Magazine* 27 Nov. 1994: 54-5.
- Thornton, Bruth. "The False Goddess and Her Lost Paradise." *Arion: A Journal of Humanities and the Classics* 7.1(1999): 72-97.
- Van Buren, Jane Silverman. *Modernist Madonna: Semiotics of the Maternal Metaphor*. Bloomington: Indiana UP, 1989.
- Walters, Suzanna Danuta. *Lives Together/ Worlds Apart: Mothers and Daughters in Popular Culture*. Berkeley: U of California P, 1992.
- Warner, Marina. *Alone of All Her Sex: The Myth and the Cult of the Virgin Mary*. 1976. New York: Vintage, 1983.
- Weaver, Mary Jo. "Who Is the Goddess and Where Does She Get Us?" *Springs of Water in a Dry Land: Spiritual Survival for Catholic Women Today*. Boston: Beacon, 1993. 76-95.